

國學院大學學術情報リポジトリ

『御伽草子』と六朝志怪との交渉：
「蛤の草紙」に関する再検討

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學大学院文学研究科 公開日: 2024-06-19 キーワード (Ja): 『御伽草子』, 六朝志怪, 「蛤の草紙」 キーワード (En): 作成者: 吳, 艶, Wu, Yan メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000491

『御伽草子』と六朝志怪との交渉

—「蛤の草紙」に関する再検討—

Exploring the Relationship between *Otogizoshi* and *Rikuchoshikai*:

A Case Study of *Hamagurinososhi*

呉 艶

キーワード：『御伽草子』 六朝志怪 「蛤の草紙」

Key Words: *Otogizoshi* *Rikuchoshikai* *Hamagurinososhi*

要旨

『御伽草子』が口承文芸に淵源することはかなり多くの先学の指摘によって示されてきた。先駆的研究業績においては、「七夕」と「天人女房」との関係、「鶴の草子」と「鶴女房」との関係、「蛤の草子」と「蛤女房」との関係などに関する論証が深められている。中日両国の異類婚姻譚にそれぞれの歴史、文化から織りなされた精神的風土が反映されている。特徴的なのは日本の異類婚説話における伝承の型と話型の一部は中国の影響を受けながらも、受容的風土に賦与された独自の様相を呈しているのである。

Abstract

Many scholars have pointed out that *Otogizoshi* originated from oral literature. The existing research results demonstrate the relationship between “*Tanabata*” and “*Fairy wife*”, the relationship between “*Tsurunososhi*” and “*Crane wife*” and the relationship between “*Hamagurinososhi*” and “*Clam wife*”. The “*iruikonintan*” between China and Japan reflects the spiritual customs woven by their respective history and culture. The most distinctive feature is that the inheritance mode and narrative mode of some “heterogeneous” Japanese love stories, although influenced by China, present a unique style related to the acceptance of local conditions.

はじめに

『御伽草子』が口承文芸に淵源することはかなり多くの先学の指摘によって示されてきた。柳田国男氏は民俗学の視点から、「女性と民間伝承」において、昔話の根底に流れる思想を解明しながら、民間伝承が大きな有意性を持つことを述べ、『口承文芸史考』の中で、記録文学と語りの文学との関わりをめぐって、口承

文学研究の重要性を強調した。その他に、松本隆信氏の『中世庶民文学——物語草子のゆくへ』、佐竹昭広氏の『民話の思想』をはじめとする先学の論説や著作が口承文芸との比較を中心に、御伽草子における昔話の痕跡を辿っている。それらの先駆的研究業績においては、「七夕」と「天人女房」との関係、「鶴の草子」と「鶴女房」との関係、「蛤の草子」と「蛤女房」との関係などに関する論証が深められ、後学がその中から説話の分析を文化の分析というマクロのレベルに繋げていくための糸口の一つを得ている。中には、中国の説話・伝承との関係に言及するものもある。両者の関係はこれまでも、先学の説により指摘されているが、例えば、「蛤の草子」は完全に日本の昔話を基盤として成立しているかについても、先行論に議論を繰り広げられてきた。本稿は先学の業績を参考に、「蛤の草紙」の独自性と中国の説話・伝承との関連の可能性を見直していくつもりである。

—

柳田国男氏は『昔話のこと』の中で、以下のように語っている。

「中世以来の日本の昔話が偶然に記録に保存せられて居た例は幾つでもあります。第一に足利時代の半ば頃から伝わっている御伽草子というものの大部分が是であり……」⁽¹⁾と。

室町時代から、江戸時代の初めにかけて、数多くの短編の物語草子が作られている。「広義の御伽草子は室町時代から江戸初期にかけて作られた物語草子の大部分を包括するから」⁽²⁾、『御伽草子』は室町時代の短編小説の汎称と認められるほど、古典としての価値が極めて高いものと言えよう。

既に、徳田和夫氏が指摘されたように、「御伽草子の時代すなわち南北朝から江戸時代初期までのおよそ三百年は、南北両朝の対立、抗争をはじめとして、応仁の乱、戦国時代を経て、関ヶ原の戦に至るまで、全国各地に戦の絶え間のない不幸な時期であった。日本の歴史上稀に見る動乱期であったと言ってよい。……それはまたこの時代の社会、文芸などあらゆる面に見られるものであった」⁽³⁾。動乱期は往々にして文学の繁栄期でもあるように、御伽草子と呼ばれる膨大な数の

(1) 『柳田国男全集』6、筑摩書房、1998年。

(2) 徳田和夫「お伽草紙の研究の来歴と今日」、『御伽草子』解説、岩波書店、1980年。

(3) 注(2)に同じ。

短編物語は実に様々な様相を示している。南北朝を経て、文学の担い手は庶民層に広がるようになり、鮮やかな庶民的色彩が御伽草子の基調を形成させた。したがって、庶民性を持つ異類婚姻譚が御伽草子の中で占める比重は大きい。『御伽草子』が前代の物語文学の伝統を受け継いだけでなく、説話や同時代の軍記物など、あらゆる先行文学の影響を受け、多種多様な作品を含んでいる。例えば、恋愛物や民話風の笑い話、出家遁世物や継子物、或いは立身出世談や英雄伝記物など、その題材はいずれも庶民文芸の性格を持ち、実に豊富多彩である。紐解けば、動植物などを擬人化した怪異談が少なからずあり、異類と人間との交渉を取り扱った作品として、「木幡狐」「鼠の草紙」「鶴の草子」「雁の草紙」「蛤の草紙」などが挙げられる。中世の文学が仏教と深い交渉を持っているという指摘が既にあつたように、中世の新興仏教の台頭という大きな時代的背景があるからである。『御伽草子』における異類物においては、人間と動植物とが結ばれたのち、その異類婚に破綻さえ生じれば、波瀾に富まず、男か女の出家遁世で結末を見せるのが殆どである。「鼠の草紙」において、ストーリーは男（鼠）の出家が終焉となり、清水詣でや高野入りといった仏教色が加えられた。悲恋遁世物としての「雁の草紙」（雁（男）と人間の怪婚譚）も、女が尼になって山田の庵に入ったという結末である。更に、日本の最古の狐女房譚だと言われる「木幡狐」では、話の最後に、

かかる畜類だにも後生菩提の道を願ふならひなり。いはんや人間としてなどか此道を歎かざらんや。かやうにやさしき事なれば、書き傳へ申（す）なり。

と記され、いかにも仏教的極楽往生の観念に浸透され、当時の民間信仰や民衆の心象世界を表現している。

一方、後漢末から六朝にかけて、中国は天災と戦禍の続く混乱の時代であった。と同時に文学に於ける新展開を模索された転換期でもある。文化面での独自性を大きく特徴付けているのが「志怪小説」と呼ばれる新しいジャンルの誕生である。仏教が輸入されるとともに、道家思想とあいまって、民間で人口に膾炙する宗教的ないし教訓的色彩の強い伝説が生まれ流布した。幾多の戦乱を経た人々は神仏などの超能力を信じ、信仰心がますます強くなり、「怪力乱神」を熱心に語り合ったのである。六朝時代の知識層における仏道両教の思想は庶民層における

民間伝承とうまく同調し、龐大な量を誇る「魍魎魍魎」の話を産出した。『搜神記』や『搜神後記』はこうした背景のもとに知識人たちに意識的に記録された志怪小説集で、後世に超現実的なことや神仙の話を語り伝えようとした。これらの話は内容が豊富で、種類も極めて多く、枚挙に遑が無いほど多彩である。『搜神記』は六朝時代の初期のものとして、志怪小説の代表的なものとされている。中には、民間説話の類型的なものが豊富に含まれており、人間と異類との交渉を伝える「異類婚説話」は後世の小説に素材を提供するものも少なからずある。それらの大部分は依然として、神話時代の神秘的匂いが漂うが、すでに作者の倫理的宗教的創作意図が多少見られるようになった。『搜神記』よりやや時期が下がって成立した『搜神後記』も『搜神記』と趣を異にせず、怪談を網羅した怪異小説集である。中には、異類婚説話は数的に『搜神記』に及ばないが、『搜神記』の後を接ぐという意味では、任意に取り上げても、『搜神記』の類型話として取り上げられる価値がある。本稿は以下に『搜神記』と『搜神後記』から具体的話例を取り上げ、試みに「蛤の草紙」との関わりを探ってみる。

二

前述のように、『御伽草子』には佛教的啓蒙が目的である異類婚説話が多いが、中では少し異色を見せたのは「蛤の草紙」である。ちなみに『御伽草子』の中に出てくる異類は狐（「木幡狐」）や鼠（「鼠の草紙」）や鶴（「鶴の草子」）や雁（「雁の草紙」）や蛤（「蛤の草紙」）など実に様々である。人間と蛤や魚や亀などの水域に生息する所謂水生動物との交渉を語るものは、古くから中日両国でともに伝承されている。『搜神記』には鯉の精の話が記され、『古事記』における異類女房の最古の話においては、海神の娘豊玉毘売命は鰐であることも、水に依存して生きてきた人間の海や河川に対する特別な親近感と愛着を訴えているのであろう。

御伽草子の世界では、これらの異類が登場して、人間に危害を加えたり、或いは人間に幸福を授けたりするのであるが、わざわざ人間を助けるものの多くは神仏の化身か、または天帝の使者のように描かれている。ここで、日本と中国の類話を取り上げ、「蛤の草紙」との繋がりを探っていくことにする。

まず、予備作業として「蛤の草紙」の梗概を書いておく。

天竺摩訶陀国の辺に、しじらという非常に貧しい人がいた。父はなく、毎日海で漁を釣っては、母を養っていた。ある日、日暮れまで魚一匹釣れない。母がひもじい思いで待ちかねているだろうと案じていたが、そのうち、釣り上げたのは、美しい蛤であった。これは役に立たぬと海へ投げ入れ、西の海へ行って釣ると、また、前の蛤がかかった。それをまた海に投げ入れたが、また同じ蛤がかかった。しじらは、「不思議だ。一度ならず、三度まで釣り上げるとはよほど縁が深いのだろう」と船内に入れたまま、釣りを続けていると、蛤が急に大きくなった。黄金の光がさし、蛤が二つに開いて、中から十七、八の美女が現われた。女から、「あなたの家に連れていってくれ」と頼まれたしじらは、「私には六十余になる母がいる。その母を疎かにしてはいけないと思って、四十になっても妻を持たないのだ」と断ったが、女から強いて頼みこまれ、仕方なく家に帰って母に話すと、母は喜んだ。母の望みでしじらの妻になった女房は、織物を作るために麻を集めて糸をこしらえ、新しく建てた機屋の中で、後から来た若い女と二人で機を織った。そして、十二ヶ月かかって立派な布を織り出すと、「市に持って行き、錢三〇〇〇貫で売ってくるように」と言いつけた。しじらは馬に乗った老人から三〇〇〇貫を受け取って帰ってきた。女房は、「この金銭で、一生十分に過せよう。これもひとえに、しじらの親孝行によるものだ。自分は観音の浄土から、使いによこされた者だ。いまはおいとましよう」と言って、白雲に乗り、南の空へ飛び去った。しじらはそれ以来、富貴繁盛して親を養い、仏の位を得て、七〇〇〇年たつと昇天した。これはまったく親孝行のおかげである。

蛤の中から現われた女と孝心深い男性との結婚であるが、人間と蛤の化身との結婚について語る点に限って、「蛤女房」などの昔話と同型である。だが、蛤女房にその伝承の原典を求めにくい。ここで「蛤女房」とその同型の話を見ておきたい。先ず「蛤女房」の粗筋をまとめてみる。

昔ある獨り者の所へどこからか美しい嫁が来た。嫁が来てからは、それまで特別美味しくもなかった味噌汁が大変うまくなる。男は不思議に思って、いつものように仕事に行くふりをして、こっそり裏に隠れて見て居た。すると嫁は摺鉢を出し、味噌をすり終えると、いきなり鉢に跨った汚いことをし

た。男はそれを見て大いに怒り、すぐ嫁を追い出した。嫁は謝ったけれども、許してくれないので、大きな蛤になってもくりもくりと這って出て行った。味噌汁には貝の汁を入れたからうまかったのである。

一読すれば明らかなように、「蛤の草紙」との間に開きが大きいことが分かる。表現、構成ともに稚拙なものであると言え、奇怪な事件が展開するとしても、話の概略が記述されるにとどまっている。それにも変わらず、両者の一致点は二つある。一つ目は既述したように、女は蛤の化身である所だが、ただこの一致するところにも異同が見られる。同じく蛤が美女と化して嫁入りして来たという異類婚姻譚によくあるパターンではあるが、「蛤の草紙」の場合、「蛤が二つに開いて、中から十七、八の美女が現われた」のに対して、「蛤女房」では、美しい嫁が「大きな蛤になってもくりもくりと這って出て行った」のである。つまり、「異類の形から女房に変身する」と「女房から異類の形に戻る」という対照的な型となっている。二つ目の一致点は「押掛け嫁」にある。勿論、これは異類婚姻譚（異類女房の報恩譚など）にある決まった型でもある。この二つの一致点を除けば、「蛤の草紙」の仏教色を払拭しても、蛤の草紙は昔話の蛤女房にけって近いとは言い難い。つまり、質的には違った両者に共通するこの二つの一致点があっても、同系ではないと言えるであろう。

ところで、「蛤女房」より「蛤の草紙」は同類の昔話の「蛤姫こ」にもっと近いのではないかと思うが、その筋をまとめると、次のようである。

昔、親孝行な男の子は両親に死なれ、貧乏で山へ薪を拾いに行ったり、海へ出て魚を釣ったりして孫ばさまと二人で暮らしていた。ある日、沖へ魚を釣りに行き、魚が一匹も釣れないので、困っていた。帰ろうと思っていたら、何だか竿にかかったものは小さな蛤だった。海へ逃がしてやったが、またピクと糸をひっぱるものがあり、やはり前と同じ小さな蛤であった。それで舟の上へ上げて置き、少したって後の方でクツという音がして、後を振り向くといつの間にか大きくなったのか、舟一杯にひろがってしまい、きれいな姉さまになってしまった。「私は観音様の使いの蛤姫こで、お前の家まで連れて行って」と言った。子供は断り切れなくなって、家に帰って孫ばさまに聞いたが、「貧乏で姉さままで入れて暮らせない」と返事をしたが、蛤姫こ

は無理に家へ泊まることになった。次の日から蛤姫こは家の裏に機織り機を据え付け、織り始めた。その姉様はきれいな観音様の模様のついたはたを毎日おっているの、皆不思議に思った。近所の人々はそれを買った。蛤姫こはその金を資本にして子供に商売を始めさせ、大繁盛した。そこで、蛤姫こは「これで安心だ」と帰ることになり、孫ばさまと子供に別れを告げて天から降りてきた五色の雲に乗って帰って行ってしまった。

この話はあきらかに異類女房の型ではないが、「蛤の草紙」に共通する点が多かり多い。

- * 親孝行な貧しい主人公
- * 釣り上げた蛤から、美女が現われる。
- * 機を織って、主人公を幸福にする。
- * 観音からの使者
- * 彩雲に乗り、帰って行ってしまふ。

唯一の相違点は既述したように、「女房」と「あね様」という設定の違いにある。けれども、「蛤の草紙」では、蛤は「女房」となっているけれど、ほかの異類婚説話（異類女房譚における狐女房や蛇女房などの場合）に比べると、「女房」の影が薄いというより、寧ろ「婚姻」の色彩は希薄ないし皆無と言わなければならない。一步進んで言えば、「女房」型でなくても、話も十分成り立つことができると言えよう。「蛤女房」に比べて、「蛤姫こ」の内容がより精緻で、比較的緩やかなテンポで話を進め、会話も挿入し、物語風に叙述する巧みなところは無視できない。「蛤女房」より「蛤姫こ」の筋が随分肥大化しているのが目立つところである。

さて、中国の六朝志怪には、異類の助けによって、一家が繁栄するという類の話が幾つか見られる。異類婚にはならないが、異類が人間を助ける過程において、異類のほうがいづも、人間の妻の役を演じることは注目に値する。

『搜神後記』巻五所載の「謝端」は以上の類型の伝承で、まずその筋を記しておく。

晋安帝の時、謝端という男がいた。幼い時に両親に死なれ、近所の人に養われていた。十七、八歳になると、品行方正な好青年になり、畑仕事に勤しみ、隣人が嫁を世話しようとした。或る日、彼は三升壺ほどもある大きな螺

を見つけ、珍しがつて持ち帰って甕の中に入れておいた。十数日後に、いつものように野良から帰ると、食事の用意が既にできている。隣人の善意だと思ったが、その後も連日誰かが家で煮炊きしてくれ、隣人に礼を言うと、「あなたが密かにもらった嫁さんが食事を作ってあげたんじゃないか」とからかわれた。彼は不思議に思い、ある時、野良仕事の途中で引き返し、垣根の外から家の中を覗くと、なんと一人の少女が甕から出て、火を燃やしている。彼は中に入り、少女に「どこから来たのか、何故食事を作ってくれたのか」と問いかけると、女は驚き甕の中に戻ろうとしたが、果たせず次のように答えた「私は白衣の素女ですが、天帝が独りぼっちで身寄りが無いあなたのことを不憫に思い、私を遣わしたのです。姿を見られ私はもうこれ以上ここに居られません。この螺で米穀を貯えればいつも食糧に困りません」と。謝端は引き止めたが、女は毅然として風雨に乗じて去った。その後、彼は神棚を建て、新年や節句のたびに、必ず祭祀を執り行った。やがて家が富み、謝端は妻を娶り、科挙試験の郷試に合格し、県知事になった。彼は素女のために廟を建て、今日の素女祠である。

この話もやはり「女房」型ではないが、「蛤の草紙」に共通する点が多い。

- * 同じ貝類の化身
- * 神様の使者
- * 超能力で男を富貴にする

男の家を富貴にする手段として、「蛤の草紙」と「蛤姫こ」はどちらも美しい布を織ると設定されている。機織りは鶴女房の伝承と重ねられていると考えるしかない。ただ通例の女が見るなというのを男が覗いてしまってタブーを犯すというパターンではない。鶴女房の自分の羽を食いぬいて、機を織る場面を連想すれば、むしろ「謝端」の田螺の殻で男の家を富裕にするという設定が順当であろう。柳田氏が指摘されたように「鳥だと幾分か機を織る光景が、心の畫に描かれやすい為、次第に其専属のようになって…」⁽⁴⁾ いるのである。鶴女房の伝承と重ねられるのは、男の家を富裕にするには美しい布を高く売り、儲けさせるという伝承が既に定着しているからである。また、機織りは昔の女性の仕事の大事な部分で

(4) 「蛤女房・魚女房」『柳田国男全集』、筑摩書房、1962年。

あったため、ここでの機織りは柳田氏の言われた鳥類の専属というよりも、むしろ女性の専属と言ったほうが順当であろう。勿論、異類婚姻譚において、異類が超能力を発揮し、人間を助けるというような伝承は珍しくないが、蛤女房が布を織るのは少し考えにくい。しかし、逆に言えば「擬人化」を徹底するには異類の姿を「人間」として描くしかなく、蛤の機織りこそ両話における異類の「擬人化」に徹したところだと言えるかもしれない。

『搜神記』卷一所載の「董永」においては、異類は動物ではなく、神女となっているが、前述の話の要素をすべて備えている。ここで「蛤の草紙」と「董永」との交渉の可能性の一端を検証してみたい。

先ず、その粗筋を整理しておく。

漢の董永は子供の頃母を亡くし、小さな車を作って父を乗せ、田んぼまで連れて行き、農作業をしていた。父親もそのうち亡くなり、葬儀の金がないため、董永は身売りをし、その金を葬儀の金に当てた。身請け主は彼の孝行ぶりに感動し、一万貫の銭を与え、家へ帰してくれた。三年の葬を済ませ、身請け主の家へ引き返し奴隷の勤めを果たそうと家を出た。すると途中で出会った一人の女が「あなたの妻になりたいです」と言って、連れ立って主人の屋敷へ行った。主人は「もう君にお金を渡したじゃありませんか」と訝ったが、董永は「恩返しに参りました」と答えた。「奥さんに何ができるでしょうか」と聞くと、「機織りができます」と答えた。それで、主人は「どうしても働いてくれるのなら、百疋の絹を織ってもらおう」と。董永の妻が十日で百疋を織り上げ、二人は主人の家を出た。妻は「私は天上の織姫です。あなたの孝行な心に感じて、天帝様があなたのお手伝いをし、借金を返してあげるようにと、私へお命じになったのです」と董永に告白した。言い終わると、空へ舞い上がって行き、姿が見えなくなってしまった。

神女が機を織って、人間の男の借金の返済を助ける話である。儒教の倫理では、親孝行が第一の徳目とされ、歴代の中国王朝に重んじられ、昔から「百行以孝為先、衆善以孝為始」（「孝は百行の本、衆善の始なり」）という儒教思想を説かれてきた。儒教教育の入門書とも言うべき『弟子規』にも「入則孝」（親孝行）という幼童向きの教訓が記され、孝行は人間の善良な行為に関連する最も重要な徳と

して、道徳訓戒に欠かせない徳目である。更に中国の元の時代に、孝行が特に優れた二十四人の故事を集め、『二十四孝』という孝子説話集まで編纂され、「董永」はその中にも収められている。「董永」の話は孝心を主題とした「蛤の草紙」と同じモチーフを有する。両話の根底に儒教道徳の宣揚意図が流れている。

「蛤の草紙」の巻末に

是ひとへに親孝行のしるしなり。後々とても、此草子見給うて、親孝行に候はば、かくの如くに富み榮えて、現当二世の願ひ、たちどころにかなふべし。まづ現世にては、七難即滅し、障りもなく、衆人愛敬ありて、末繁昌なるべし、後の世にては、かならず仏果を得べきこと疑ひなし。ひとへに親孝行にして、この草子を人にも御読み聞かせあるべし。

と記してあり、『御伽草子』の教訓的、啓蒙的な性格が端的に露呈されている。同じく「董永」の末尾にも作者の執筆意図が明らかにされ、

縁君至孝、天帝令我助君償債耳。

(あなたのこの上ない孝行をめでて、天帝様があなたのお手伝いをし、借金を返してあげるようにと、私へお命じになったのです。)

という神女の告白に孝行を説く傾向がはっきり見られる。

両話とも異類の要素を加味したものだが、すこぶる暗示に富んでいる。所謂「至孝天に通ず」である。貧乏ではあるが、親孝行な男(或いは前述の「謝端」のような善良で勤勉な若者)は天帝の心を感動させ、天女の妻を得、更にその妻の力により富を得るようになり、妻が再び天に戻るとというのが、神婚系に属するパターンである。同系統の話はいずれも善行を表彰し、勧善の意が込められたものである。大島建彦氏が指摘されたように、民間の昔話の世界では、主人公の異常な幸福が婚姻と致富というように、ほぼ二つにまとめられる⁽⁵⁾。この点では、正に「蛤の草紙」も、「謝端」と「董永」も、その主人公の幸福が以上の二つの趣向を中心に考えられ、そこから素朴無垢なる民衆の願いが見られるのである。

(5) 大島建彦校注『御伽草子集』、日本古典文学全集36、小学館、1974年。

こう見てくると、「謝端」と「董永」はどちらも「蛤の草紙」の唯一の典拠であると言い切ることはできない。つまり両者の影響関係ははっきりしていなく、ここで結論を出すに足るだけの十分な論拠とならない。だが、少なくとも中国からの類似説話の伝播の影響を受けていないとは言えないと思う。「お伽草子の大多数の作品は、その題材、叙述の方法が説話のそれと近似しており、複数の説話を縫合して仕立て上げたものや、説話を並べ立てただけの作品も少なくない」⁽⁶⁾という徳田和夫氏の指摘があるが、推測を付け加えるなら、「蛤の草紙」は両方から影響を受け、二つの伝承の重ねられたものであると考えられるのではなかろうか。ところで、日本文学は中国文学を如何に受容してきたのであろう。平安朝においてはそのまま鑑賞したのに対して、中世ではそれを日本文学に移植し、素材に取り入れて、眺めようとした傾向が著しいと市古貞次氏が説かれている⁽⁷⁾。管見の限りでは、「蛤の草紙」も素材としての中国ものを日本の伝承に入れ込み、つまり中国の渡来物を使いながら、更にそれを日本の伝承に重ね合わせたこと（典拠の二重化）と考えられよう。この結論を補強するなら、まだまだ形態と伝流から相互の関わりを跡づけ分析をしなければならない。勿論、これは推定に頼った結論であるが故に、「蛤の草紙」を考察するにあたって、必ずしも必要な基本的視点とは言えない。それにも関わらず、日本の中世草紙と中国の六朝志怪との繋がり片片鱗が見て取れよう。

おわりに

以下の要約で本稿を締めくくろう。異類婚説話を的確に読解していくことがその民族の伝承と文化を理解するうえで、一つの足掛かりになる役割を果たすと言える。おびただしい数の異類婚姻譚には時代と土壤によって様々な色合いが付け加わってきたが、庶民の間に根を下ろしただけに、どの時代の異類婚姻譚からも説話文学を通した庶民の触感が伝わってくる。また、中日両国の異類婚姻譚にそれぞれの歴史、文化から織りなされた精神的風土が反映されている。特徴的なのは日本の異類婚説話における伝承の型と話型の一部は中国の影響を受けながら

(6) 注(2)に同じ。

(7) 市古貞次『中世小説の研究』、東京大学出版会、1955年。

も、受容的風土に賦与された独自の様相を呈しているのである。古典文学における中日関連研究をめぐる関心は専ら、その出典研究に置かれてきたが、本稿では、日本説話の典拠を中国の文献に探り、その痕跡を明らかにしようとした。

テキスト・参考文献

- 大島建彦校注『御伽草子集』、日本古典文学全集36、小学館、1974年。
徳田和夫校注『御伽草子』、岩波書店、1980年。
竹田晃訳『搜神記』、平凡社、1964年。
汪紹楹校注『搜神記』、中国古典文学基本叢書、中華書局、1979年。
前野直彬編訳『六朝・唐・宋小説選』、平凡社、1968年。
松本隆信『中世庶民文学——物語草子のゆくへ』、汲古書院、1989年。
佐竹昭広『民話の思想』、平凡社、1973年。
安永壽延『伝承の論理』、未来社、1971年。
「口承文芸史考」、『定本柳田国男集』7、筑摩書房、1962年。
柳田国男監修『日本昔話名彙』、日本放送出版協会、1948年。